
私と夏と扇風機

蒼藍紺。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と夏と扇風機

【Nコード】

N4546V

【作者名】

蒼藍紺。

【あらすじ】

ある夏の日。主人公智香が使っていた部屋の扇風機が人間になった！？

一応恋愛小説らしいよ！

扇風機が人間になるなんて何のアニメ？（前書き）

書いてる本人も意味が分からなくなっている小説です。
観覧には色々注意してください。

扇風機が人間になるなんて何のアニメ？

私は夏が好きである。

何故かって？

だって私の初恋が夏だったから。

蝉が苛々するほどに鳴いている。

「あー、五月蠅い！」

私、千条智香。

物心が付いた頃から夏が大嫌い。暑いし、蝉は五月蠅いし。

そして扇風機がないと生きてられない。

私の部屋は窓からはいつてくる風はあんまり無いから扇風機でどうにかしなくてはならない。

「扇風機扇風機・・・」

立ち上がって扇風機をつける。

「ああああああ〜」

扇風機といったら前に座ってエコーに決まってる。

友達に子供とか言われたけどこれは癖なのでどうしようもない。

・・・あ、大事な事を思い出した。

アイスも必須アイテムだった事。

「面倒だけど今家にアイスないし買いに行こうかな。コンビニすぐそこだし。」

扇風機ちゃんまた後でねー！

扇風機を消して家を出る。

その時扇風機が少し動いていた事に私は気づかなかった。

「外暑い。部屋より暑い。アイス諦めようかな」

自然と呟く程度には暑い。

出来るだけ急いで（それでも早歩きだけど）コンビニへ行った。
・・・あ、自転車に乗ってこれば良かった。

コンビニの中は涼しく、心地いい。

その中で私はアイスを目の前ににらめっこをしていた。

「んむむ・・・ガリ。リ君はおいしいしお財布にも優しい値段・・・
だがしかし・・・すぐ解けてしまうという難点をお持ちになら
れている・・・

次にピ。・・・これは少ない上にお財布に少し厳しい値段・・・
だがしかしこれはおいしくて・・・

・・・あ、パ。コ置いてあるじゃん！明日も食べれるしこれでい
いか」

お得意の自問自答でアイスを選び終わり、会計を済ませようと思っ
たときポケットに居た

携帯電話が震える。

「電話・・・ま、後でいいか」

名残惜しいけど会計を済まし、コンビニを出た。

歩きながらパピコを食べながら歩いていると再び携帯電話が震えた。
流石に二回目なので電話に出た。

相手はお母さん。どうせ買い物とかだろうけど・・・しょうがない
ので一応出る。

「もしもしー？」

『あ。智香！ようやく出てくれたわね！あのね、家にね』

「うん」

『男の子が貴方を探してるって来たのよ。心当たりあるかしら？』

「え？男の子？」

全く心当たりが無い。

だけれどどうしても気になる。

『心当たらないのね？』

「否、うん、あるから私の部屋に上げておいてくれる？」

『わかったわ』

「んじゃ急いで家帰るねー」

電話を切って私は駆け出す。

女の子ならともかく男の子を部屋に上げるのは危ないって言うのは考えないでおこう。

「ただいまー！」

急いで冷凍庫にもう1つのパピ。を入れて部屋へ行った。

「えーっと、こんにちはー？」

「智香、ようやく来てくれたんだね。待ってたよ」

目の前に居た男の子は凄くカッコよくて、凄く心地いい声をしていた。

「・・・誰か知らないけど、君、誰？」

「智香気づかないの？別にいいけどね」

「え？・・・あ、暑いから扇風機・・・あれ？扇風機が無い！？」

お母さんが片付けるはずはない。

じゃあ、扇風機は・・・？

「あ、智香気づいてくれた？僕扇風機だよ。この部屋に居た、ね」

「へー、この部屋の扇風機かぁ・・・ってええええええええ！？」

今時そんな夢のような話があるわけない。

うん、これは夢。そう、夢！

「智香、夢とか考えてるでしょ？違うよ、現実だよ」

「なんで私の心読めるの！？」

「だって顔に書いてあるから」

そっぴいえば昔から顔に全部出ると言われてたなあ。

「・・・てか、うん。なんで扇風機が人間になるの？」

それにしても自分が冷静すぎて気持ち悪い。

あ、これはあれか。テンションが上がりすぎて落ち着いちゃったパターン。

「・・・そりや気になるよねー。僕は君が好きになってしまったから神様に許可をもらって人間にしてもらったんだ」

「話ぶっ飛びすぎでしょう」

ハッ、つい敬語に・・・！

しかもさり気なく人生初めての告白ももらいましたよどうしましう。

敬語が抜けませんどうしましょう。

あれ、体温が上がってきた気がする。

夏だもんね。暑いだけか。

「・・・顔、赤いよ？智香」

「そ、そんな事ないよ！つか神様って何よ！簡単に人間になれて良いの！？」

「それはさくs・・・ちよつと少しの間待ってて、智香。

僕は戦わなくてはならない相手が出来てしまったから。」

行き成り意味不明なことを言い出して目の前から消えた。

よくわからないけど何処からか物音が聞こえる。

人が喧嘩をしているようなそんな音。

私はそれをスルーしろ、と本能が告げるのでスルーをして、

さつき言われた事を思い出していた。

・・・あれ、おかしい。神様とかの部分も触れるなって本能が言っている。

仕方なく別のことを思い出そうとすると・・・

・・・か、考えたくないかな、かな。

すると目の前に行き成りさつきの男の子が戻ってきた。

さつきはピシツとしていた服が若干シワになっている。

「おかえり？」

「ただいま。あ、何があつたかは聞かないでくれ。厄介な事になるから」

「う、うん」

その事には触れないで置こう。触れたら私もあのようになる気がする

たからである。

「あ、えつと扇風機君じゃ呼びにくいし・・・ってか今までちゃん付けだったのごめんね」

「あー、名前か。ちゃん付けは気にしてないしいいよ。名前は智香が付けてよ」

「私名前のセンス無いんだけど・・・？」

今までつけてきた名前の数々はセンスないと言われ続けてた。

事実センスないし。

私がつけるって大役過ぎる。

「せ、扇風機だから・・・千季^{せんき}とか？」

「智香って単純だね、そんなところが好きだけど」

「う、五月蠅い！千季なんて大嫌い！」

「ツンデレ？智香可愛いなあ」

「五月蠅い五月蠅い！扇風機無いから暑いんだけど！」

「あ。扇風機？出すの忘れてたよ、今から出すね」

・・・あれ？へんしーん！とかじゃなくて出すなの？

すると言った通りポンツと扇風機を出した。

「これ僕の代わりに使って。じゃあ僕は一度家に帰るから。また、明日来るね」

「え、明日も来るの？」

「君と付き合うために毎日来るよ」

「は、はあ・・・？」

「じゃーね！智香！大好きだよ！」

頬にやわらかいものが押し付けられる。

「ひゃいつ！？」

そのまま何処かへ消え去ってしまった。

・・・キスしておいてそれはないよね・・・うつ。

扇風機が人間になるなんて何のアニメ？（後書き）

続きます。

想像より長くなっちゃったなんて絶対言いません。

扇風機と一緒に学校生活開始って何ですか？前編（前書き）

タイトルがアニメとかラノベにありそうな奴になってるのは何でしょう。か。きつと作者の趣味ですね。家にあるラノベは基本ギャルゲとかの奴ですし。

扇風機と一緒に学校生活開始って何ですか？前編

千季^{せんき}が人間になった次の日。（つまり1話目の後です）

夏休みの中にある学校に行かないといけない日。

つまり、全校出校日。

そんな日に智香は寝坊をした。

普段自分で起きている為、親に学校があると伝えていなかった。

「んぎゃああああああああああああ！ど、どどどどどどど！？」

時計の針は7時半をさしていて、いつもなら制服に着替えてる頃。

「と、とりあえず冷静に！ひっひっふー！」

昨日は千季がした告白やキスの事でどうしても寝れなかった。

それが寝坊の原因だ・・・って冷静に分析してる場合じゃない！

急いで制服に着替えて外に出る。

「今から走れば絶対間に合う！」

小さな声で呟き家を出る。

教室の扉を開け、急いで時計を見ると時間はまだ間に合っていた。

「た、助かったあゝ・・・」

「あ、ちー！」

「にゃー！りゅー！」

「もっぷうー！」

学校来て即効りゅー（松野流華^{まつのりゅうか}）を抱きしめる（抱きしめられる）

事が出来るなんて！

今日も男子が私達に視線を向けるが・・・まあ、気にしない。

だつてりゅーが可愛げふんげふん！

色々考え込んでいるとりゅーが話しかけてきた。

「ちー今日遅かったね、寝坊したの？」

「流石りゅー、私の事分かってるうー！」

「まあ、ちーが遅れるのって大抵寝坊でその日は何か事情が『必ず』あるもんねえ」

「べ、別に何も無いしい！」

誰だって扇風機が人間になってそいつに告白されたなんて簡単にいえる奴なんて居るのだろうか。

・・・しかもそいつが少し好きに・・・ってこれはないない！

「お、ちーお得意のツンですか、そうですか。維持でも聞くぞー？」

「だ、だから何も無いっていつてるでしょう！りゅーなんて大嫌い！」

あつ、またやつちゃった・・・

「ちー、うちのこと嫌い？・・・そう、だよ。うちなんか好かれるはず、ないもんね・・・」

「違つ、りゅーの事大好き！う、嘘なの！」

「・・・本当に？」

「本当！」

「じゃあ昨日何があったかおしえなさあああい！」

しまったこれじゃあ前と同じだああああ気付くの遅かったああああああ

と、チャイムが鳴り響く。

「・・・今日は遊ぼうね、ちいちゃん・・・クスッ・・・」

「ひいつ・・・」

今日は何かよくない事ばかりしか起きない気がする。

教室の扉が開くと、教師が入ってきて当たり前のように出席を取る、かと思いきや。

「出校日に紹介するのもあれだが、本人の希望で今日転校生を紹介する。」

瓜田^{かでん}ー、入ってこーい。」

い、嫌な予感が・・・

教室の扉を開けて入ってきた彼は、昨日見かけたアイツだった。

「おはようございます、瓜田^{かでんせんき}千季と申します。」

私の予感当たったー！

クラスの女子が騒ぎ始める。

そして男子は千季に嫌な感じの目を向ける。

「智香ちゃん！」

私を今呼ぶなー！女子の敵にい！

「ん？瓜田は千条の知り合いか？」

「はい、先生。僕たち幼馴染なんです。」

・・・さようなら、私の楽しい学校生活^{スクールライフ}。

ああ、クラス中の視線が全部私にい・・・

「智香？どうしたの？顔色悪いよ？大丈夫？」

その心配が私をどんどん苦しめるう！

「先生、私ちよつと保健室行つてきていいですか？・・・気持ち悪くて・・・」

「そうか、一応の付き添いで保健委員の・・・松野、付き添ってやれ」

「はい」

りゅーが保健委員でよかった。

他のクラスの子とはそこまで仲良くないから一緒に居るのがもつと苦痛だ。

「ちー、大丈夫？」

「う、うん・・・多分・・・」

私とりゅーは教室を後にした。

・・・その時、千季が凄く心配そうな顔をしていた気がした。
気がただけで、本当なのは知らない。

扇風機と一緒に学校生活開始って何ですか？前編（後書き）

とっても眠いので今回はここまでで許してください！
短くて本当に申し訳ない……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4546v/>

私と夏と扇風機

2011年10月9日13時30分発行